

[Japanese Ver.]

2014

The second quarter

Beautiful SIHEUNG



## 始興史の生き証人、 老木の話

肌に触れる空気の感触が春の始まりを告げる。しかし、我々はすでに目で季節の変化を感じ取っていたのかもしれない。また、厳しい冬を耐え抜いて寒々とした枝にそっと芽を出した木々。そのように木は、全身で彼らなりのメッセージを伝えている。その話じつと耳を傾ければ、数十年、あるいは数百年にわたり木が大事に秘めてきた話と歴史が、昔の人々の息づかいと共に胸に染み込んでくる気がする。



01 米山洞の連理木(樹齢約60年と推定)

02 浦洞の松

03 下上洞のケヤキ

## 始興の木が聞かせてくれる話

昔から人々は村の入り口や守護山などに木を植え、大切に育てながら暮らしてきた。また、その木は長い間村の人々と共に呼吸し、時には世知辛い世の中での疲れを癒し、時には豊かな暮らしがしたいという素朴な祈りを聞いてくれ、村の生きた歴史となった。

始興には残念ながら歴史的な遺跡がさほど多くない。烏耳島貝塚や先史住居址、烏南里支石墓などが残ってはいるが、昔の人々の様子を詳しく知るには不十分である。このような点で、昔の人々の話を秘めている木々がまだ残っているということは、大きな祝福なのかもしれない。

枝がのびのびと広がる様子が学者の気概を表しているようだと「学者樹」とも呼ばれるエンジュ、身分の違いから現世では添い遂げられない男女が死んでその愛を永遠のものにしたという伝説のある連理の枝、儒学生の勉強の妨げになるため、雌木を雄木に変えてほしいと祭祀を捧げて祈ったという成均館のイチョウ、姜邯贊將軍が地に突き立てた杖が育ったという伝説のある新林洞のアバマキ。このように、すべての木にはそれぞれのエピソードが込められている。

始興でも多くの木がそれぞれのエピソードを刻みながら生きている。木を植えて育ててきた昔

の人々の暮らしを近くから眺め、触れられるようにしてくれる始興史の生き証人もいえる木。長い間同じ場所で人々を見守ってきた老木の話に耳を傾けてみよう。

※ 現在、始興には全部で13本の保護樹がある。





約200年

## 浦洞の松

「浦洞には古い木がたくさんあるよ。樹齢500年のイチョウとか400年のケヤキ、それから200年のボクも含めてね。村の人たちはボクのことを「西のチャンスン(村の守護神として立てられる木像)松」って呼んでる。村に邪気が入ってくるのを防ごうと、以前セウゲチャンスンノリ(村の守護神を祭る行事)のとき、住民が「北方逐鬼大將軍」っていうチャンスンを作ってボクの横に立てたんだ」



約350年

## 鞍峴洞のエノキ

「ボクは海との関わりが深いんだ。朝鮮時代に海岸線がもっと内陸側にあったとき、漁船がボクを海からの目印として活用したんだよ。ボクの体に船の錨網を結んだりもしたな。日本統治時代は、キルマジェの住民が毎年端午(旧暦5月5日)になるとブランコを吊るしてブランコ遊びを楽しんだよ」



約500年

## 浦洞のイチョウ

「私の年齢は500歳。遠い昔、浦洞の人たちが鳥耳島から厄が入ってくるのを防ぐために私を植えたんだ。漁師たちは私を航海の目印にしたりもした。今は村の前が畑だけど、以前は海だったんだ。その頃、住民たちは毎年旧正月と7月に私と隣のケヤキの前に祭壇を作って大漁と安全を祈ったものだよ」



約400年

## 下上洞のケヤキ

「守護木と言えば私だって抜きにできないよ！私も住民たちが毎年旧暦10月初めの吉日を選んで祭ったほど、ハジゴル(下上洞の昔の地名)を黙々と守ってきた守護木として認められてるんだ。昔の人たちは私のことを都堂(村の守護神を祀るお堂)木と呼んだりもしたよ」



約500年

## 錦李洞のケヤキ1・2

「俺たちケヤキは遥か遠い昔から錦李洞をしっかりと守ってきた守護木だ。今も昔も蒸し暑い夏には、住民が涼しく休めるように木陰を作ってあげたりしてるよ。俺たちの横にはケヤキがもう二本ある。だから、皆ひっくるめて錦李洞ケヤキ群とも呼ばれてる」

## 論谷洞のイチョウ

「ボクの名前は『カン』だよ。200年前に論谷洞出身のカン・ウォンサムさんがボクを植えてくれたんだ。1970年代くらいまでは夏になると人が木陰を求めて集まる憩いの場だったけど、今ではすっかり弱くなっちゃった。排気ガスをたくさん吸ったせいだと思う。他の木たちも弱らないように気をつけて、大切にしてくれたらいいな」



約200年





## 星を見る、 月を収める

### 始興市生命農業技術センター天文館

優しい眼差しのペ・ヒョギルさんと明るい笑顔のイ・ミョンウンさん夫婦、それから二人によく似たジェウ(13)、ヒョン(10)姉弟は久々の外出で浮き立っている。始興だけでなく首都圏の名所ともなっている蓮花テーマパークがある生命農業技術センター。その2階の天文館へ宇宙旅行に行く日である。

### 本物よりリアルな星の世界を旅する

5mのドームスクリーンと高解像度のデジタルプロジェクターが設置された天体投影館は、さながら小さな宇宙船。イスに座ると明かりが消え、真っ暗な空に無数にきらめく星が灯った。まだ本格的な探査が始まりもしないうちに、ジェウとヒョンがロク々に嘆声を上げる。「うわあ！うわあ！」好奇心旺盛な年頃。宇宙旅行の案内をしてくれるのは解説員。夜空に見える天体と美しい宇宙の風景は、夢を忘れた大人にとっても神秘的に感じられる。目の前で動く星と鮮明に描かれる星座に、母も子も思わず手を伸ばしてみる。画面がズームアップして魔法のように木星が現れる。解説員の声に合わせて空は夜明けになったかと思うと絵本になり、再び朝になって宇宙の多彩な表情を見せてくれる。ペ・ヒョギルさん一家はドームスクリーンだということをすっかり忘れ、宇宙旅行にどっぷりはまった。

### 興味深いもろもろの話

「星座はいつ作られたか知ってますか？」

解説員の質問にヒョンが自信ありげに答える。「ギリシャ・ローマ時代です」星座にギリシャ・ローマ神話が付けられたのは2千年前で、それより先に羊飼いで星座が作られた。オリオン座、おおぐま座、おうし座。四季の星座について説明される間、姉弟は知っている星座の名前を挙げるのに忙しい。





「ひしゃく星はどこ？こぐま座は？」  
 「あれはふたご座かな？」  
 お母さんも子どもたちとやりとりしながら星座を探していく。太陽の通り道(黄道)にある星座は「黄道十二星座」と呼ばれており、これが一般的によく知られている星占いの12星座である。このとき、ジェウが質問する。  
 「新しく作られたものもありますよね？」  
 解説員は慌てた様子。約13,000年に一度地球が揺れるが、このときに地軸の傾き角度が変わり、星の軌道にも変化が生じた。そのため、「へびつかい座」ができたわけだが、高校生でもなかなかできない質問である。じっと見守りだけだったお父さんの口からも感嘆の声が漏れる。

#### 月の写真撮りにまた来よう

見晴らしのいい屋上に上がれば、農耕地帯の戸曹原(ホジョボル)と蓮花テーマパークが目の前に広がる。本来なら備え付けの大型反射望遠鏡(複数の鏡を使って作られた望遠鏡)や屈折

望遠鏡など、いくつかの補助天体望遠鏡で本物の星を観察する番だが、今日は残念ながら雨が降って見られない。昼は太陽の黒点まで見え、夜は望遠鏡で見える月のクレーターまではっきりと携帯電話のカメラに収められると聞き、姉弟はロクに言う。

「今度また来よう」「月を見にまた来たい」  
 何も見えない望遠鏡をのぞきながらも楽しそうにしている子どもたちにつられ、お母さん、お父さんも笑顔になる。

「これほど星座に詳しく、関心があるとは全然知りませんでした」ペ・ヒョギルさんはこれまで見たことのない子どもたちの姿が不思議で、殊勝に感じられる。

「普段は勉強するようにあまり言わないほうですし、家にある神話や科学の本といえばマンガばかりなんですよ」イ・ミョンウンさんの自慢ではない自慢が続く。ヒョンとジェウの瞳は星より明るく輝き、姉弟を見つめる夫婦の眼差しは宇宙より広がった。家族の大切な思い出がもう一つ増えた。

#### <始興市生命農業技術センター天文館>

2012年12月21日に開館した始興市生命農業技術センター天文館の主観測室は、5mの観測ドームと自動天体追跡システムを備えた大型反射望遠鏡が設置されており、それ以外に備え付けられている反射望遠鏡や補助屈折望遠鏡、ミニドブソニアン望遠鏡などで月面、惑星、二重星、星団、星雲、銀河など、美しく神秘的な天体の観測ができる。



蓮花テーマパーク・  
ケッコル生態公園に息づく生命  
始興は生きている

自然と人が調和しながら共存するエコシテイ始興。ここには生命を包み込んで育む「蓮花テーマパーク」と「ケッコル生態公園」がある。多くの動植物が生息しているため、それだけ訪れる人も多い。天然記念物をはじめ、様々な動植物が土、水、空気、光を共有しながら生きている。自然の生命体がこののびのびと過ごす場所をゆっくりと歩いてみた。



1



2



3

1. アオサギ
2. チョウセントノサマガエル
3. ハゼ
4. クロツラヘラサギ



## 与えつくす母親のように… 蓮花テーマパーク

「蓮花テーマパーク」にはオオオニバスやオニバスをはじめとする約20種類のハスと、約80種類のスイレンが植えられている。ハス田は鳥たちの餌が豊富なため、夏の留鳥であるバンヤゴイサギ、シラサギなどの安息所となっている。特に、絶滅危惧2種のチョウセントノサマガエルが集団で生息しており、所々でカエルの息づかいも聞こえる。

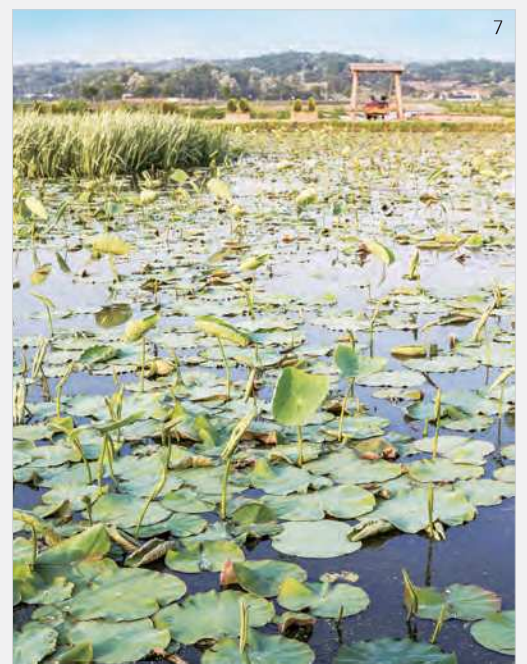
5月。種根が植えられた田にはハスの代わりに水がいっぱい。畦沿いにゆっくり歩くと土のぬくもりが感じられる。ゴマ粒のように咲いた小さな花びら、その間をせわしなく行き来するバツタが目止まる。ギンヤンマが元気に水の上を飛び回る一方、イトトンボは草むらで風に乗って遊ぶ。足音に驚いたチョウセントノサマガエルは、人を避けて一目散に水辺に駆け込む。

じっと覗き込んだ田の水の中にも生き物がたくさんいる。滑るようにアメンボが通り過ぎた場所には、いつの間にかメダカの一団がやって来て陣取る。オタマジャクシはウキクサの間を行き来しながら泳いでいる。生えてきたばかりのハスの茎にかろうじて付いているモノアラガイと、土から水滴を作って息を吐き出すタニシのゆっくりした動きも不思議。鳥たちも忙しい。貴重な存在である天然記念物のクロツラヘラサギとのおぼのシラサギ、名も知れぬ夏の渡り鳥がどこかに作った巣と田の間を行き来しながらせせと餌を運ぶ。

ハス田では、また別の生き物たちに食べ物や休み場所、隠れ場所、ねぐらを提供し、母親のように多くの生命を養い育てる。小さな生き物たちの温かい息づかいのせいだろうか。半日をまるまるハス園で過ごして立ち去る頃には心が和んでいた。



- 5. スイレン
- 6. コガモ
- 7. 五月の蓮花テーマパーク
- 8. シラサギ





## ケッコル生態公園で聴く風の合唱

蓮花テーマパークから約10分の距離にある「始興ケッコル生態公園」は韓国で唯一、内陸の奥深くにまで入り込んでいる内湾の潮流路(韓国語で「ケッコル」)が見られる場所。街の中に湾が形成されており、年中観光客がたくさん訪れる。黄海と同じく、1日2回ずつ満潮と干潮が起こる。また、様々な希少動植物が生息しており、景観が美しく地形的価値も高いことから、2012年には沿岸湿地保護地域に指定された。

散策路に沿って公園を横切る真昼。公園内にある塩体験場では、天気良く風が涼しいタイミングに合わせて塩を収穫している。塩田と共に最も目につくのは高さ22mの展望台。螺旋状の階段をぐるぐる回って6階に上がると、生態公園全体と遠くは戸曹原、浦洞、月串洞、長谷洞が見渡せる。

干潟沿いに広がる湿地にはさわやかな風が吹いている。目を閉じてしばらく耳を澄ませしてみる。葦原からカサカサと小さな優しい調べが聞こえてくる。まるで風が歌う合唱曲のように。

葦だけではない。浜沿いに歩きながら生命力あふれる動植物に見とれる。水の溜まった湿地には希少植物であるアイアシの群落がある。1年に7回色が変わるといふシチメンソウや固い泥土の中に生息するアッケシソウも見られ、コオニシバやフクド、マツナも群れをなして育つ。

シオマネキやアシハラガニなどのカニは泥土に穴を掘って生息する。梅雨でなければなかなか姿を見せないジムグリガエルも湿地の一部を占める主人。片時も休まずに鳴いたり動き回ったりして視線を引きつける動物は、様々な鳥たち。干潟や小さな水たまりで餌を探す「ホウロクシギ」も目につき、天然記念物2種であるチョウゲンボウやハイロチュウヒ、クロツラヘラサギなどもここに住みついている。

顔を上げれば近くに島のように立っているアパート団地。そのそばにある生きた潮汐流路は、人間にも安らぎの場を提供する。驚異的な自然の中で他の生き物と共存しながら生きていくということ。それによって生き物も人も幸せになれる。



11. シベリアオオハシシギ

12. シチメンソウ

9. ツルシギ

10. ケッコル生態公園



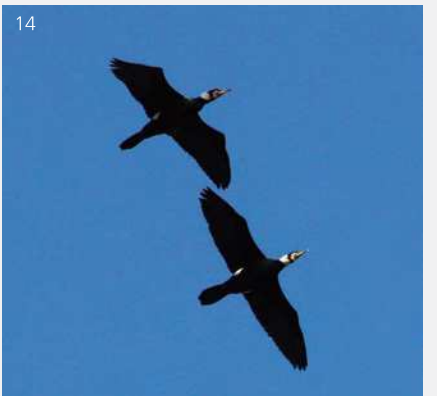
10



13

13. ハクセンシオマネキ

14. カワウ



14